

活における自由遊びの場で、幼児は自発的に活動し、心身の円満な成長発達をとり得るのである。また、最も自然な条件のもとに置かれる機会である故、幼児の真の姿が発揮され、保育者にとっては、幼児のあらゆる側面を観察し、個人の指導をなし得る場である。三才児保育における自由遊びが以上のような意義をもつと考えるとき、より適切な保育を行なうためには、日々の保育の現場で、自由遊びの時間に幼児の行動を観察記録し、その結果得るところの資料に基づき、カリキュラム構成を考えてゆきたいのである。以上のことから私達は、保育中、自由遊びの時間に子どもの遊びを観察記録した。

調査方法 遊具六〇種類について(室内三七、外遊二三)毎日登園後の自由遊びの時間と、一度集りを持った後の遊び時間に、遊んだ遊具の種類と使用回数、及び遊び方を記録した。観察対象は三才児男女各四名であり、期間は五七年四月から五八年三月までである。

結果及び考察 (1)一年間を通じての遊具の使用頻度をとると男女児とも外遊びが多く好まれている事が解る。ただ女児は男児に比較して、二、三学期には、室内遊びが多いが、これは、季節の関係と「ままごと」「切紙」等の遊びを好む女児の特性を示しているものと思われる。これから外での活動が充分に出来るような条件を満す必要があると考察される。(2)運動量の必要とする度合によって遊具を三種類に分ち、その使用度数をみた。これによれば男女児とも、一年間を通して運動量大の遊びを好んでいる。幼児の心身の発達には、全身的な遊びが必要であり、三才児においても同様である事を意味している。但し三学期には、女児は運動量小の遊具使用が増えている。これは冬期に入って坐ったままでの遊びを好んでいる結果と考えられる。(2)の結果から例えば、ブランコ、ジャングルジム、すべり台などの単純な運動具の使用出来る機会を多く与える必要が考え

られる。(3)遊び方をその形態によって分類し、その頻度をみた。遊具玩具を使用しない遊びも含めて、一人遊びか、平行遊びか、協同遊びかの三つに分類した。ここで言う協同遊びは、三才児の社会性の発達から考えれば、むしろ集合的な遊びを意味するが、他の遊びの形態と区別するためにこのことばを使用した。この結果は男女児とも、一学期にはひとり遊びが約五十パーセントもみられるが、三学期には減少し、反対に協同遊びが増加している。また三学期には、運動量の少ない遊びであっても、他人との交渉を密接に持つた遊び方が多くなった事は、同じ遊具でもその遊びの内容は非常な変化をきたす事を示している。したがってそのような可能性を含んだ遊具や遊びを準備する必要がある。

以上のような結果から、三才児は、比較的少人数のクラスであり、身も小さいため、とかくせまい部屋を与え動きも制限し、安全のみをはかりがちであるが、私たちは、これら考察した事柄を土台として、三才児の保育カリキュラムの構成を考えてゆきたいと思うのである。(大会発表論文抄録1-2頁)

「社会」保育(幼稚園)と「道徳」

指導(小学校)との関連について

佐賀大学 上野 辰 美

幼稚園教育要領は幼稚園の教育内容が必ず小学校との一貫性を十分に保持して計画されるべきことを要求し、また小学校学習指導要領はその教育内容ないし指導方法における発展性ないし系統性を期待している。この意味で幼稚園の「社会」保育と小学校の「道徳」

指導との関連において、そこに含められる問題点を分析検討し今後の解決対策を考えてみたい。

従来小学校では教科書中心の系統的組織的な学習形態が重視されて、子どもの側の個性差や経験域に対する考慮が不足し、逆に幼稚園では幼児の自然な生活行動を本位とする環境構成を重んずることから、ともすれば教師の周到な指導計画を軽視する傾向があった。

社会保育の指導目標は、幼児を中心にその集団的な生活環境の中に日常生活行動をつみ重ねることによって、自主協同の精神の芽生えを養わしめることにある。したがって、社会保育は幼稚園教育内容六領域の一つであると共に、しかも他の五領域のすべてに共通する基礎的因子として機能的効果が求められる。また小学校の道徳は、あくまでも学校教育活動の全体を通して行なう道徳教育の計画の一環として、これを拡充深化統合するように組織的発展的に計画することが望まれている。したがって特設道徳の指導は、すべての学習ないし生活活動を周縁とする道徳教育の全体計画の統合の中心として位置付けられていると見られる。

この故に「社会」保育は幼児自身の生活行動を基盤として外延的に教育領域が設定され、その上に全体構造を掩うに足る指導者の計画性が要求される。これに対して「道徳」指導は教師の確立する組織的な計画性を中心として、そこから子どもの学習ないし生活行動の展開が内包される形になっている。結局幼児の活動性と教師の指導性は一元の両極であり、幼稚園では後者を小学校では前者を一層重視するという相互に採長補短の努力を要する。

さらにこの両者のカリキュラム構造からそれぞれの内容的関連をとりあげて考察すると、

1 独立生活の訓練——要領は独立生活に対する指導目標として

最初に生活習慣の自立と仕事の訓練をあげているが、小学校の道徳ではその第一領域（日常生活の基本的行動様式）に属する第二（生活の自立）・第三（礼儀作法）・第四（整理整頓）の三項がこれに該当する。しかもこれらの指導内容は人間として最も基礎的かつ日常的な行動様式として入学前の幼児期から習慣化する生活訓練を必要とするが、小学校低学年では一層高度の自主的生活処理の能力を形成することが期待される。

2 交友生活の調整——要領は交友生活の調整のための指導内容として、友だちとの親和と協力を求めているが、道徳の内容としては特に第四領域（道徳的態度と実践的意欲）の中の第二四（親切）と第二六（協力）の二項がこれに直接関連する指導内容である。

3 集団生活への適応——要領は規則の理解遵守と公德心の養成とをその指導目標としてあげているが、これに関連する道徳の指導内容には、第二領域（道徳的心情と道徳的判断）の中に第二九（規則の理解遵守）と第三二（公德）の二項をあげている。

4 社会の理解——要領は社会的関心や行動範囲の拡大ないし社会文化財の利用に関して、感謝の念や社会的興味関心及び行事参加の三項を指導内容にあげている。これに関連する道徳の内容としては、第四領域に属する第二五（感謝）・第三〇（権利と義務）・第三一（勤労）・第三三（家庭）・第三四（学校）・第三五（国家）・第三六（世界）の各項である。

以上幼稚園教育要領にあげられた社会保育の指導内容と、小学校学習指導要領道徳篇に示された四領域三六項目の指導内容との相互関連を分析してみたが、要するに幼児の発達段階と活動経験の実態の上に、幼小相互の密接な関連のある発展的計画構成が要望される。